10月号　営農インフォメーション

水稲・小麦の管理のポイント

水稲・・・令和３年産に向けて、土づくりの指導を行いましょう。

小麦　・・・水稲収穫後、速やかに排水溝などを設置し、ほ場の乾田化に努めるよう指導しましょう。

【水稲】

① 土づくり

安全・安心でおいしいお米をつくるには地力を高めることが大切です。

土づくり肥料　**田華の豊稲（写真１）を１０ａあたり６０～８０kg（３～４袋）**を施用し、稲わら・もみがらと一緒にすき込みます。１０月～１１月の気温（地温）の高い時期にすき込みを行い、腐熟を早めましょう。また、カドミウム吸収抑制対策として、ｐＨ値 6.5 を目指した土づくりを行いましょう。

※　野焼きは火災や、煙により周辺住宅の環境や道路の通行に支障をきたす恐れがあるため、絶対にやめましょう。

写真１
田華の豊稲

土づくり肥料「田華の豊稲」の効果・特徴

１．ケイ酸ベース肥料と比べてケイ酸の吸収利用率の高い「熔成ケイ酸リン肥」をベースとした肥料であり、省力・低コストを実現した土づくり肥料です。

２．リン酸・ケイ酸・苦土・アルカリ分を主とした成分がバランスよく含まれていることで水稲を健全に育て、収量や品質の向上につながります。

３．保証成分としてアルカリ分を含んでおり、土壌の酸性を穏やかに矯正し、カドミウム吸収を抑制する効果があります。

【田華の豊稲】

保証成分（%）				含有成分（%）
リン酸	苦土	ケイ酸	アルカリ	鉄分
４%	９%	３０%	４５%	２%

○リン酸…植物の生長、分げつ、根の伸長、開花、結実を促進します。

○苦　土…リン酸の吸収を助ける働きがあり、植物の活力の基本となります。

○ケイ酸…葉や茎を丈夫にし、害虫の侵入を防いで倒伏を軽減する効果があります。

○アルカリ…カドミウムの吸収を抑制する働きがあります。

② 深耕

土づくり肥料の施用後、耕耘を行います。耕耘は１５ｃｍ以上を目標に行います。深耕は、根の伸びる範囲を広げるとともに土をやわらかくし根の活力を高め、出穂～登熟期の窒素や水分の吸収が高まり、健全な稲を育てることにつながります。反対に耕起深が浅い場合は根の生長を妨げ、収量の減少につながる恐れがあります。

※作業は低速で行いましょう。

【小麦】

① 排水対策

畑作物である麦は湿害に弱い作物であり、播種に備え排水溝を設置することが重要です。プラウ式溝堀機などを使用して排水溝を設置し、排水対策をしっかりと行いましょう。また併せて、弾丸暗渠（あんきょ）などの施行も行うと、ほ場の乾田化が図れます。田面に亀裂が入る程度によく乾燥させると麦の播種時の作業性が高まり、発芽および苗立ちが向上します。また、降雨時には、しっかり排水されるように排水溝の点検を必ず行いましょう。

プラウ式溝掘機での
溝切りの様子

排水対策の様子
しっかりと尻水戸までつなぐこと

② 施肥

麦は酸性に対して弱い作物です。pH 値が６以下になると収量の減少につながりますので、酸度矯正とリン酸補給を併せて、<u>はたけ太郎を１０ａあたり１００kg（５袋）</u>施用しましょう。

はたけ太郎

今後の施用管理

※施用時期は気候により異なるため目安になります。

全層施肥基準

	肥料名	施肥量 kg/10a	施用時期
土づくり	はたけ太郎	１００	１０月下旬
基　　肥	化成肥料 14-14-14	３０	１１月上旬
追　　肥	化成肥料 14-14-14	２０	１２月下旬
穂　　肥	化成肥料 20-0-10	２０	２月下旬～３月上旬
実　　肥	硫　　安	２０	４月下旬

省力型施肥基準【分施】

	肥料名	施肥量 kg/10a	施用時期
土づくり	はたけ太郎	１００	１０月下旬
基　　肥	セラコート R2500	３０	１１月上旬
穂　　肥	セラコート R2500	３０	２月下旬～３月上旬

【セラコート R2500】

〇肥料成分　チッソ 25（速効性 12.5:CG ｺｰﾄ 12.5）ーリン酸 0ーカリ 10

〇遅れ穂の発生を抑制できます。(但し湿田ほ場では遅れ穂の抑制が難しい場合もあります)

〇穂肥に実肥にあたる成分が含まれます。

〇田植時期に係る作業と競合する実肥を省略することができるため労力の分散が図れます。

〇施肥について、基肥と穂肥を同じ肥料を同じ量で施用することが可能になりました。

◎平均収量が全体の上位を占めており一番安定している施肥体系になります。

省力型施肥基準【一発】

	肥料名	施肥量 kg/10a	施用時期
土づくり	はたけ太郎	１００	１０月下旬
基　　肥	麦 パ ン チ	４０	１１月上旬
実　　肥	硫　　安	２０	４月下旬

③ 種子更新

自家採種を繰り返していると、熟期や品質にばらつきが見られるようになるので、毎年種子更新を行いましょう。

④ 種子消毒

麦の病気には種子伝染するものが多く、裸黒穂病・なまぐさ黒穂病・斑葉病は種子伝染する病気です。発病後の防除は困難であるため、必ず種子消毒を実施しましょう。種子消毒剤については以下の通りです。

【種子消毒剤】
●適用病害虫：紫斑病、なまぐさ黒穂病、裸黒穂病など
●使用量：乾燥種子重量の 0.5%　※種子 10 kgに対して 50 g
●使用時期：播種前　　●消毒方法：粉衣処理

⑤ 播種

早すぎず、遅すぎず適期・適量播種を行います。麦は播種が早すぎると厳冬期までに幼穂が分化し、凍結害や寒害により不稔粒の原因につながります。播種量が多いと過繁茂となり病気や倒伏につながります。また、播種量が少ないと茎数確保ができず減収につながるので注意しましょう。

●播種時期

ふ く さ や か　・・・・　１１月１日～１１月２０日頃

※黒節病など被害防止のために、「ふくさやか」は必ず１１月に入ってから播種を行います。
※ここ 2 年程は不稔麦（凍霜害）により収量低下が見受けられているので、播種時期については、11 月に入ってからが適期ですが、天気予報（長期気象予報）により上旬播種、中旬播種など考慮が必要になります。

●播種量

品種	全層播き（ばら播き）	機械播き（条播き）
ふくさやか	8～10 kg／10a	6～8kg／10a

●令和２年産小麦不稔の原因と対策等については、令和３年産麦施肥設計書・資材申込書を確認ください。